

現代文・知識

(問題冊子 p.66 ~ p.65)

解答

- 1** 問一 (1) こんいん (2) いかく
問二 (1) 貢献 (3) ほんそう (4) あずき
問三 (1) 哀愁 (4) 肖像
(2) 深 (3) 霧
- 2** (1) (4) (1) ③ (2) ① (3) ④
(4) (1) 筋 ③ (2) (5) (2) ① (3) ④
(7) ひざ (8) 余髪 つむじ (9) (6) (3) ③ 拍車
(10) つまり (9) あわ

解説

- 1** 問一 漢字の読み設問。
(1) 「婚姻」は、「こんいん」と読み、結婚すること。
(2) 「威嚇」は、「いかく」と読み、武力などでおどすこと。
(3) 「奔走」は、走ること、またかけまわって努力すること。
- 問二 漢字の書き取り設問。
(1) 「貢献」は、力を尽くすこと。
(2) 「肯定」は、認め、同意すること。
(3) 「哀愁」は、もの悲しいこと。
(4) 「肖像」は、人の容貌を写しとった絵や彫刻のこと。
- 問三 四字熟語に関する設問。
(1) 「摸索」は、あれこれ考えて試みること。「策」は、はかりごとなどの意味。
(2) 「意味深長」は、意味が深く、含蓄があること。言外に意味があること。

(3) 「五里霧中」は、五里四方もある深い霧の中で方向を見失うこと。

2

それぞれの誤答を確認しよう。

- (1) ①の「セオリー」は「理論・学説」。②の「オリジナリテイ」は「独創性」。④の「イデオロギー」は「歴史的・社会的立場に制約された、人間の行動や生活様式を決定する根本的なものの考え方」。
- (2) ②の「重文」は「雨が降り、風が吹く」などのように、「一つの文の中に、主語と述語の関係が二つ以上あって、それぞれが対等にならない文」。③の「単文」は「鳥が飛ぶ」などのように、「主語・述語の関係が一組だけで成り立っている文」。④の「韻文」は「詩歌など韻律のある文章」。
- (3) ①の「ナイーブ」は「純真で素朴な様子」。②の「ノウハウ」は「産業上有用な技術・また、それに関する知識や経験など」。③の「モラル」は「倫理・道徳」。
- (4) ①の「ノンフィクション」は「虚構を使わず事実からくる感動をねらって記した文章」。②の「イマジネーション」は「想像・想像力」。④の「アニメーション」は「ひとこまひとこまの画面を描き、それを連続撮影して、動いているように見せる映画」。
- (5) ②の「プロローグ」は「物事の発端」。③の「アイテム」は「項目・条項」。④の「ダイジェスト」は「著作物・映画などを要約すること、またそうしたもの」。
- (6) ①の「イズム」は「主義」。②の「クレーム」は「苦情・文句」。④の「叙情」は「自分の感情を述べること」。

古文・知識

(問題冊子 p. 54 } p. 52)

解答

- | | | | | |
|------|---|---|---|----------|
| | 4 | 3 | 2 | 1 |
| (10) | (7) (4) (1) (7) (4) (1) (7) (4) (1) (1) | (1) (7) (4) (1) (7) (4) (1) (1) | (1) (4) (1) (4) (1) (1) | (1) |
| | (2) (1) (2) (4) (2) (5) (1) (5) (1) (4) (5) | (2) (5) (2) (8) (5) (2) (8) (5) (2) (2) | (1) (4) (1) (4) (1) (4) (1) (4) (1) (4) | (5) |
| | (8) (5) (2) (8) (5) (2) (8) (5) (2) (2) | (2) (1) (5) (4) (3) (2) (3) (2) (3) (2) (4) | (9) (6) (3) (9) (6) (3) (6) (3) | (2) |
| | (2) (1) (5) (4) (3) (2) (3) (2) (3) (2) (4) | (1) (4) (2) (4) (2) (1) (4) (2) (1) (4) (1) | (1) (4) (2) (4) (2) (1) (4) (2) (1) (4) (1) | (3) |
| | (9) (6) (3) (9) (6) (3) (6) (3) (6) (3) (3) | (1) (4) (2) (4) (2) (1) (4) (2) (1) (4) (1) | (1) (4) (2) (4) (2) (1) (4) (2) (1) (4) (1) | (4) |

解説

- 1**
- 文末がシク活用形容詞「をかし」の已然形「をかしけれ」となっているため、強意の「こそ」が入るとわかる。
 - 訳に「光『さえ』ない」とあるので、類推の副助詞「だに」が入る。きちんと覚えておこう。
- 2**
- 上接する語は、ヤ行下二段動詞「見ゆ」の未然形もしくは連用形の「見え」である。また、下には名詞(体言)「鳥」が続いていることに注意していけば、未然形に接続する打消の助動詞「ず」の連体形であると判別ができる。
 - 助動詞の「なり」には、意味的に二つの種類がある。一つは伝聞・推定の助動詞(終止形接続<ラ変には連体形接続)であり、もう一つは断定の助動詞(体言・連体形接続)である。この二つの助動詞は、上接語の活用形で識別する。設問文では、名詞「人」に接続しているの

この「なり」は断定の意味である。この助動詞は地名などに接続すると「存在」を表す意味で解釈される。「駿河なる」であれば、「駿河の国にある」となる。合わせて覚えておこう。また、設問文の「この国の人にもあらず」の「に」も、やはり断定の助動詞「なり」（連用形）である。

なお、二つの助動詞「なり」を識別するために、「土佐日記」の冒頭部分がよく利用されている。困ったときのために、覚えておくと便利である。

（終止形 伝聞・推定

男もすなる日記といふものを、

（連体形 断定

女もしてみむとてするなり。

- (3) 助動詞で「ぬ」という活用形が出てくるのは、完了の助動詞「ぬ」の命令形と打消の助動詞「ず」の已然形である。

この「ぬ」は接続助詞「ども」に続いている。「ども」は已然形接続であるので、この「ぬ」は已然形である。なお、「おどろく」は古今異義語で、ここでは「はつと気づく」という意味。

- (4) 助動詞で「ぬ」という活用形が出てくるのは、完了の助動詞「ぬ」の終止形と打消の助動詞「ず」の連体形である。

設問の「ぬ」は文末にあり、完了の助動詞の終止形かとも思えるが、文中には係り結びの助動詞「ぞ」がある点に注意したい。係り結びは、「ぞ・なむ・や・か」の係助詞があると文末は連体形で結び、「こそ」の場合は已然形で結ぶ。したがって、この「ぬ」は打消の助動詞「ず」の連体形である。

- (5) 上接語は、四段動詞の連用形「聞き」である。連用形に接続する助動詞「し」は、過去の「き」の連体形だけである。

過去の助動詞は「き」「けり」と二つあるが、前者は直接体験を表し、後者は間接体験を表す。

この文の「おはす」は「あり」の尊敬語である。

- (6) 上接語は「思は」で四段動詞の未然形である。したがって、この「む」は推量の助動詞である。「む」には「推量」「意志」「適當・勧誘」「婉曲・仮定」などの意味がある。判別の仕方は、主語が一人称のときが「意志」、一人称のときが「適當・勧誘」、三人称のときが「推量」となることが多い。「婉曲・仮定」の場合は連

体形で用いられることが多く、下接語は体言・助詞「は」「に」などである。

語末が「む」となる助動詞は、この「む」を初めとして、過去推量の「けむ」、現在推量の「らむ」である。

- (7) 「けむ」は、過去推量の助動詞。推量の助動詞「む」と現在推量の助動詞「らむ」と合わせて覚えるとよいだろう。

「けむ」の意味は大きく「過去推量」「過去の原因推量」「過去の伝聞・婉曲」の三つに分類できる。この助動詞の特徴は、「らむ」が現在の推量表現であるのに対して過去の事柄を回想的に推量することである。

設問文は、『源氏物語』の「桐壺」の一節である。意味は「過去の原因推量（…たのだろう）」と解釈される。

- (8) 設問の「り」は、四段動詞「なる」の已然形に接続している。したがって、存続・完了を表す助動詞「り」である。下接語は過去の助動詞「けり」（ここは係り結びで連体形）であることから、「り」は連用形である。

この助動詞は、四段動詞のほかにはサ行変格活用動詞の未然形「せ」にしか接続しない。（命令形に接続という意見もある）

3

- (1) 下接語の「まし」の接続で判断する。「まし」は活用語の未然形に接続する。

なお、設問文の「くましかば…まし」という形は、「まし」の意味として重要な「反実仮想」の典型的な形である。

- (2) 傍線部の動詞は、上一段活用の動詞であるから、この動詞は未然形か連用形であると判断できる。あとはそのいずれであるかを、下接の助動詞「たり」の接続から判断する。「たり」は、完了と断定を表す二つがある。そのうち未然形・連用形のいずれかに接続する可能性のあるのは、連用形に接続する完了の「たり」である。

- (3) 動詞の活用形を問っているが、実際は下接する助動詞の接続の理解度を確認している。傍線部の下は打消の助動詞「ず」であるから、その上には活用語の未然形がくる。

- (4) 文末の活用形を問われている点に注意。文中には係り結びがないことから、「れ」は終止形あるいは命令形が想定される。活用して「れ」となるのは、完了の助動詞「り」の已然形・命

命令形と受身・尊敬などの意味を持つ助動詞「る」の未然形・連用形である。上接語は、尊敬を表す動詞「給ふ」の已然形・命令形と判断されることから、ここは四段の已然形に接続する完了の助動詞「り」の命令形となる。

(5) 「まじき」は不適當・禁止の意を表す助動詞「まし」の連体形。「まし」はう行変格活用以外の活用語の終止形、う行変格活用の連体形に接続する。ここは上接語がう行変格活用の「あり」である。

なお「まし」は、「べし」の意味を打ち消したものと考えると理解しやすい。

(6) 動詞の活用形を質問しているが、実際は下接する助動詞の接続の理解を確認している。傍線部の下は完了の助動詞「ぬ」の終止形であるから、その上には活用語の連用形が接続している。

(7) 動詞の活用形を質問しているが、実際は下接する助動詞の接続の理解を確認している。「と」は引用を表す格助詞で終止形接続。したがって、傍線部の下は連用形接続の助動詞「ぬ」(完了)の終止形なので、「来」は連用形であることがわかる。なお、カ行変格活用は、未然形「来_レ」・連用形「来_ル」・終止形「来_ル」・命令形「来_ム(よ)」の読み方に注意しよう。

(8) 傍線部が、文末だからといって、終止形であるとは限らないので注意しよう。文中に係り結びや疑問・反語を表す副詞が使われている場合がそれである。文末の活用語の活用形を判別するときには、それらの語が文中に使われていないかをまず確認しよう。ここでは係助詞「こそ」の結びになるので、「侍れ」は已然形となる。

(9) 文末の活用形を質問している。係り結びになっていないかなどの注意が必要になる。また、推量の助動詞「む」は、終止形と連体形が同じなので、慎重に設問文を読まなくてはならない。

ここでは係助詞「か」があるので、文末の「む」は連体形と判別できる。係助詞「か」は見落としやすいので注意しよう。

4

(1) 「ふみ」は基本的な古文単語の一つである。意味は「書物・漢詩・学問・手紙」など広がりを持つ。なお、「漢詩」の意味では「作文」を使うこともある。

(2) 「いかく」という形は、基本的には疑問・反語表現と理解しておこう。次にいくつか挙げて

おく。

「いかが」(疑問) どのように。

(反語) どうして〜か。

「いかに」(疑問) どうして。

(反語) どうして〜か。

(願望) なんとかして。

「いかに」(疑問) どのように。なぜ。どのくらい。

「いかに」(疑問) どれほど。

(3) 「つれづれなり」は、『徒然草』の冒頭で有名な形容動詞である。「単調な時間の流れの中で屈託した気持ち、暇をもてあますような気持ち」を表す。

(4) ②を参照のこと。

(5) 「あぢきなし」は、「無益だ・つまらない」「不快である」「耐え難い」の意味である。意味をしっかりと理解しておく必要がある。

設問文では、どちらの意味でも解釈できそうであるが、「出家してけり」に注意して、「世の中を」どのように感じて出家したのかと考えて解釈を決める。

(6) 「あさまし」は、好悪の両方の意味で使われる言葉であるので、前後の意味を確認しながら判別していく必要がある。基本としては「驚き、あきれられるばかりだ」と押さえられる。それが広がりを持ち、「(あきれ) 情けない」「見苦しい」「あさはかだ」などの意味で使われている。

設問文は、「もののあはれ」を理解できない人に対して「あさまし」といつているのだから、悪い意味で用いている。

(7) 「ながむ」は、漢字で書くと「眺む」で、「物思いなどをしながらぼんやり物を見る」、また「物思いにふける」の意味。この語は「遠くを眺める」の意味よりも「物思いをする」の方に意味の重点があるので、そちらを忘れないようにしよう。

また、「ながむ」から転じた名詞「ながめ(眺め)」は和歌において「長雨」との掛詞として用いられることが多いので、和歌を解釈する際には注意が必要である。

(8) 「かづく」は「被く」と書き、「頭からかぶる(かぶらせる)・褒美としていただく(与える)」などの意味の重要語。「潜く」と書き、「潜る」という意味もある。

(9) 「たのむ」は、「依頼する・頼る・信用する」の意味である。現代語と違う意味もあるので、

しつかり整理して覚えておきたい。

- (10) 「ゆかし」は、動詞「行く」が形容詞化した語。「対象に強く心ひかれ、そこに行きたい」というのが原義である。
「見たい・聞きたい・知りたい」などと覚えておくようにしよう。

古文・読解

(問題冊子 p.51 ~ p.50)

解答

- 問一 A ① D ②
 問二 ①
 問三 ②
 問四 (1) ④ (2) ①
 問五 ③

解説

問一 古文は、主語を省略した文章が多いので、主語を確認しながら読んでいかななくてはならない。特に接続助詞の前後は判断に迷う場合が多いので、注意が必要である。

設問の文章は、主人公の男と女を中心にして物語が展開していく。そこに「かの高き人」が前半部分に登場してくる。

傍線部Aは最初の一文の文末にみられる動詞の主語を問う問題である。この文は最初に主語がなく、人物があらわれるのが中程に「女」、続いて「かの高き人」である。そこまでの主語はだれであるのかは明示されていない。主語を補って述語との関係を示すと次のとおりになる。

そのかみ、(男は)ものいはで、奥にはひ入りて、隠れ立ちて、見れば、女、部押し上げて、かの高き人をぞいだしける。

設問部分の直前に「かの高き人」があるのに惑わされないように。「かの高き人を」とある点に注意すれば主語ではないことがわかる。古文においても格助詞の「を」が主語を表すことはない。

傍線部Dも前後に人物が示されていないので、和歌の直前に示されている「男」を手がかりにして人物関係を整理していく必要がある。また、場面構成を理解するうえで「えこそ。しばしや」の発話がだれであるのかも把握しておく必要があるだろう。ただし、文章が切れずに続いていくので、

接続助詞に注意して読んでいく必要がある。

主語と述語との関係は次のように整理できる。
 それを見て、男、(あらはなる……)の歌といひて、ふといでてゆきければ、(女は)「えこそ。しばしや」とひけれど、(男は)いとかう憂しと思ひて、とまらざりければ、(女は)いひてかくなむ。

注意しなければならないのは、「ふといでてゆきければ」と条件節のあるところは、その前後で主語が変わりやすいということである。

問二 登場人物の関係を整理しながら、発言の意図の理解を確認する設問である。

傍線部Bの前には主語が明示されていないので、まずだれが発言しているのかを確認しておく必要がある。また、この場面の状況を丁寧に把握しておく必要もある。そのうえで「おもしろの花や」と発言している意図を考えるべきだろう。

この部分の主語と述語の関係を整理すると次のようになる。

この男、かう、うつつに見つることの心憂きことと思ひて、よに知らず心憂かりけれど、もの一言をだにはむ、さても、はた、見けりこそは思はれめとて、板敷きの端に立ち寄りて、声高く「あな、おもしろの花や」といへば、この女、……

文の冒頭に示されている「この男」がそのまま主語として「この女」の直前まで係っていく。途中は意味が取りにくいかもしれないが、動詞を中心にしてそのつながりを確認していくとおおよそ理解できるだろう。

場面としては、女が「かの高き人」を送り出す場面である。傍線部Bの直後に「この女、奥へも入りはてざりければ」とあるので、女が見送った後、まだ部屋の中に入りきらないうちに、男が女に向かつて言いかけているのである。さらにその後の女の動揺した発言を押さえておけば、正解は絞り込めるだろう。【現代語訳】を読んで前後の内容を確認しておこう。

問三 和歌の内容を確認する設問である。

主人公の男と女との関係をここまでの場面を中心に丁寧に把握して整理しておく必要があるだろう。そのうえで、男が何に対して「あらはなること(非はつきりしていること・明らかなこと)」と言っているのかを理解するべきである。

この場面では、女が別の男(非かの高き人)と交際している現場を主人公の男が目撃してしまつ

た事態を指していることが理解できれば、正解は導けるだろう。問二の設問ともかかわるので注意が必要である。

問四 女が詠んだ和歌の現代語訳と内容理解を確認する問題である。

「桜花・風・散る」などにたとえられている内容を丁寧に理解していく必要があるだろう。

- (1) 現代語訳では、「吹かずは」が順接の仮定条件（ししたならば）の意味になることが理解できているかが構文の理解のうえで必要になる。また、「散らじ」の「じ」が打消推量（打消意志）の助動詞であること、「風し」の「し」は強調の助詞であることを押さえる必要がある。
- (2) 内容理解の設問では、「桜花」が女の比喩になっており、「風」が「かの高き人」をたとえた表現になっているのを把握する必要があるだろう。「風が吹く」は、身分の高い人から言い寄られることを表現している。「散らじ」は自分（女）は身分の高い人から言い寄られなければ、なびいたりすることはないのだと男に訴えているのである。

男に弁解しつつも、風さえ吹かなければなびかないのにと、風が吹いたらなびくことは否定していないことを捉えよう。

問五 物語全体の内容把握を確認する設問である。

主人公の男と女の関係とそれぞれが詠んだ和歌の内容が、相手に何を伝えようとしているのかをしつかりと押さえたい。一つ一つの選択肢を吟味する必要があるだろう。特に最後のふたりの関係がどのようになったかはしつかり理解しておきたい。

現代語訳

その時は、（男は）何も言わず、（庭の）奥の方に入り込んで、隠れて立って、見ると、女は、格子戸を押し上げて、例の貫人を送り出していた。この男は、こう、はつきりと（現場を）見たことが情けないことよと思い、いしようもなく辛く思っただけれども、（せめて）なにか一言だけでもいつてやろう、それにしても、とにかく（現場を）見つけたことだけは（女に）気付かれないと思つて、板縁の端に近づき、大声で「ああ、きれいな花だなあ」と言うと、この女は、（まだ）奥へ入りきらなかつたので、だれかと思つて、外を覗いた。（すると、男と）目を合わせて、（女は）「どうして、ここに、こうして」と言うので、（男は）「この庭前の花が、目の前ではつきりと散つてゆくのを、見届けよう（と思つて）、やつてきまし

た」と言つた。（というのは）その家の前に、桜がとても美しく咲いて、春の終わりごろだったのか、（しきりに）散っているのだった。それを見て、男は、

はつきりとわかることを抗弁するな。（目の前で）桜の花が春はおしまいたと散つているのですから。（二人の關係はおしまいたばかりに、あなたのお心が、他へ移つているのを、この目で見たのですから。）

と言つて、さつさと出ていったので、（女は）「とても、そんなことは。しばらく（お待ちになつてください）」と呼び止めたが、（男は）まったくこれではやりきれないと思つて、止まらなかつたので、（女は）押しつけがましく次のように（詠んできた）。

目に見えて移ろいやすい花に見えても、桜は風さえ吹かなければ散らないのに、と思ひます。（私も浮気つぽく見えても、激しい風が吹くように、どうしようもない身分の高い人から言い寄られなければ、心を移したりはしないと申します。）

と言つてきたが、（男は）「よそへ出かけて留守なのだ」と言つて、返事もやらなかつた。

出典 『平中物語』

漢文・知識
(問題冊子 p. 49 ~ p. 46)

解答

- | | | | | |
|----------|-----|-----|-----|-----|
| 1 | (1) | (4) | (1) | (5) |
| 2 | (1) | (1) | (4) | (2) |
| 3 | (4) | (1) | (2) | (3) |
| 4 | (1) | (4) | (1) | (4) |
| 5 | (1) | (4) | (2) | (5) |
| 6 | (7) | (4) | (1) | (2) |
| | (4) | (1) | (2) | (3) |
| | (1) | (3) | (5) | (6) |
| | (8) | (5) | (2) | (3) |
| | (1) | (5) | (4) | (2) |
| | (6) | (3) | (6) | (3) |
| | (4) | (3) | (2) | (4) |

1

私たちが日常用いている熟語は、漢文の基本構造を知るうえでの基礎資料といえるであろう。特に(4)、(3)、(5)は漢文訓読上のルールを学習する際の重要な例である。

- (4) ① 主語と述語の関係 (例 日没^{にちぼつ}…日没^{ひぼつ}す)
日本語と同じように主語の後に述語がくる。(4)の「年長^{ねんちやう}」は「年長^{ねんちやう}ず」と読む。
- (3) ② 修飾語と被修飾語の関係 (例 深海^{しんかい}…深^{ふか}き海)
日本語と同じように修飾語は被修飾語の上にかかれる。(3)の「歓声^{かんせい}」は「歓^{よろこ}びの声^{こゑ}」と読む。
- (5) ④ 述語と目的語・補語の関係 (例 登山^{とんざん}…山^{やま}に登^{のぼ}る)

目的語(他動詞が述語のとき、目的語となる語)・補語(述語の意味を補足する語)は、原則として述語の後にくる。(5)の「絶交^{けつこう}」は「交^{まじ}わりを絶^たつ」と読む。この場合、下の漢字から上の漢字へとさかのぼって読むことになる。

*目的語と補語の区別にあまり神経質になり過ぎることはない。送りがなに「ヲ」をとるものが目的語で、送りがなに「ニ・ト・ヨリ・ヨリモ」をとるものが補語であるという、一応の目安を持つておくとよい。

2

「二点」と「レ点」とを組み合わせた、「レ点」の問題である。「レ点」は、「レ点」で返つた文字から、さらに一文字以上はさんで返つて読む場合に用いる。注意点としては、「レ点」で返つた後に、「二点」が作用するということである。単なる「二点」と比べると、

□	□	□	□		□							
1	2	4	↑	□	□	□	□		4	1	3	2

のように、違いがはつきりとする。また、「返り点のついていない語が出発点」ということから、

□	□	□	□		□
3	1	2			

を一番に読むことがわかっただろうか。

3

- (1) 返り点に従つて、漢文を訓読する順序を確認する。

「二点」は原則として、返ろうとする文字から、一文字以上はさんで上に返る場合に用いる(3-1-2)。そして、「二点」のついてい

る文字から、さらに一文字以上はさんで上に返る場合、「三点」を使う。したがつて、設問では「王は胡の王の吾が国を攻むるを聞く。(王は胡の王が自分の国を攻めるということを聞く。)」と訓読できる。

- (2) 「一二三点」の使い方は(1)で述べた通り。設問では「以て吾が足を濯^あぶべし。(「それで私の足を洗うことができる。)」と訓読できる。
- (3) 「一点」と「レ点」とを組み合わせた、「レ点」の問題である。「レ点」は「レ点」で返つた語からさらに一文字以上はさんで返つて読む場合に用いる。注意点としては「レ点」で返つた後に「二点」が作用するということである。「二点」と読む順番を比べると、

□	□	□	□		□	□	□	□	□	□	□	□
4	↑	4	1	3	2							

のように違いがはつきりとする。したがつて、設問は「花無きを待ちて空しく枝を折る(こと)莫^なかれ。(花が散つて無くなつてしまつた後で、いたすらに枝を折つてはいけない。)」と訓読できる。

4

- (1) 書き下しのルールの確認である。書き下し文では、

- ① 漢字を読む順に並べ、カタカナで書かれた送りがなをひらがなに直す。
- ② 置き字のように読まない漢字は書かない。
- ③ 助詞・助動詞に当たる漢字はひらがなに直す。
- ④ 再読文字の一度目の読みはそのまま漢字を当て、二度目に読む部分はひらがなで書く。という、ルールがある。ここでは「之」が「の」という助詞なのでひらがなに直し、「而」が置き字として用いられているので書き下し文には書かない。設問は「人間の感情は現れやすく、抑えがたいものである。」という意味である。

- (2) ここでは「之」が「の」という助詞なのでひらがなに直し、(①・②が誤り)、「於」が置き字として用いられているので書き下し文には書かない(①・④・⑤が誤り)のである。設問は「千里もの長い旅路も、第一歩を踏み出すことから始まる(大事業も手近なところからはじめなければならないことのとえ)。(「老子」)」という意味である。

- (3) (1)で述べた書き下し文のルール③の「助詞・助動詞に当たる漢字はひらがなに直す。」に関する問題である。

「不^す可^べ」は「くしてはならない。くするな。」の禁止を表す。「不」はここでは打消の助動詞「ず」、「可」はここでは「くしてよい。」という意味の助動詞「べし」であり、どちらも助動詞であるので、ひらがなに直す必要がある。問題文は「わずかの時間も軽んじてはならない。」という意味である。

- (4) 設問では「於・而・於」が置き字として用いられているので、書き下し文には書かない。また、文末の「也」は、ここでは「くである」という断定の助動詞に当たる。したがって、ひらがなに直さなければならない。設問は、「天に徳があつて、人民に恵みを与えるためである。」という意味である。
- (5) ここでは「於・而」が置き字として用いられているので書き下し文には書かない。また、「之」は、ここでは「これ」と読む指示代名詞。したがって、漢字を残すので注意しよう。設問は、藍の草から取った青色が、もとの藍よりも青いことから、弟子が先生よりもまざつていることのたとえとして用いられる。

5

- (1) 漢文の基本構造は、「主語十述語」修飾語十被修飾語「述語十目的語・補語」である。設問の構造は、1「主語十述語^ハ管仲^ハ十欺^ク（管仲は欺いた）」、2「修飾語十被修飾語^ニ常^ニ十欺^ク（常に欺いた）」、3「述語十目的語・補語^ニ欺^ク十鮑叔^ヲ（鮑叔を欺いた）」となり、1と3に共通する「欺いた」を中心として文章を一つにすれば、意味がとれるであろう。
- (2) 「不^す（弗）」は、動詞や形容詞などの用言を否定する際に用いられる。設問の場合は「知る者」「言ふ者」のそれぞれの述語「言ふ」「知る」が「不」で否定されている。したがって「知る者」は「言わない」、「言ふ者」は「知らない」という意味になる。
- (3) 漢文の基本構造は、「主語十述語」修飾語十被修飾語「述語十目的語・補語」である。設問文の構造は、1「主語十述語^ニ范增^ニ十目^ス（^ニ范増は目で合図をした）」、2「修飾語十被修飾語^ニ数^ニ十目^ス（^ニたびたび目で合図をした）」、3「述語十目的語・補語^ニ目^ス十項王^ニ（^ニ項王に目で合図をした）」となる。1と3に共通する「目」を中心として文章を一つにすれば、意味が取れるであろう。

「目」は「見る」と同じ意味で「みる」と読むこともある。

- (4) 動作・状態や物事を打ち消す形式を否定形という。「無^な（莫）」（くない）」は、「非（匪）」と同じく主に名詞を否定するのに用いられる。したがって、名詞以外の語句を否定する場合は、連体形にするか、「コト」を送る。「不（弗）」は、動詞や形容詞などの用言を否定する際に用いられる。日本語では、否定の言葉は文末につくことが普通であるが、漢文では否定する内容の上に置かれ、原則的に下から返つて読む「返読文字」である。設問では、「無^な不^べく^ス」＝「くしないものはない」という意味の二重否定となっている。
- (5) 部分否定に関する設問である。部分否定とは「否定詞十副詞」の形を取り、副詞の状態の一部を否定するものである。「副詞」くするとは「限らない」という意味。設問の「不^す常^ニく^ス」は「いつもくするとは限らない」となる。逆に「常^ニ不^すく^ス」のように「副詞十否定詞」の形を取るものは**全部否定**という。この場合「いつもくしない」となる。部分否定と全部否定では、副詞の送りがなに違いがあることにも注意しよう。
- (6) 「非（匪）」は、②の「不（弗）」と違い、「無（莫）」と同じく名詞を否定する際に用いられるが、特に「状態」を否定し、「くではない」という意味を表すときに用いられる。したがって、設問の場合は「みずから我を理解する」という状態「ではない（非）」＝「君自身が私を理解しているのではない。」という意味になる。
- 「不（弗）」「非（匪）」「無（莫）」の語は、目的語・補語がなくても原則として下から返つて読む。このような漢字を「返読文字」といい、ほかに「有」「可」「所」「欲」などがある。
- (7) 疑問形に関する設問である。漢文における「安」は、疑問詞として「いつクンヅ（^ニどうして）・いつクニカ（^ニどこに・どこで）」と読むことが多い。
- 疑問詞「安」が使われた一文が、疑問形・反語形のどちらであるかは、文末に注意する必要がある。反語形の文末は、「活用形の未然形十ン（十や）」である。疑問形は普通「活用語の連体形」で結ばれる。特に疑問詞が「くッ・くカ」という読みの場合、係り結びにより、文末が連体形となる。

6

(1) 「已」には副詞の用法として「すでに」と読み、「とつくに・以前に」という意味がある。漢文における頻出語となつていたのでぜひ覚えておこう。設問は「舟は已に行けり。」と訓読する。また、「已」は動詞として「止」と同じ意味で、「やム」とも読むほか、文末で限定や断定を表し、「のみ」とも読む。

(2) 「与」は動詞としての「あたフ(＝あたえる)」のほか、副詞の用法として「とも」と読み、「一緒」という意味がある。さらに「与」は、「：与(と) (＝：とと)・くミス(＝仲間になる)・あつカル(＝関係する)」など複数の意味を持つ多義語であるので、ぜひ辞書などで確認しておこう。

(3) 漢文を読む際には思想的な背景を持つ語にも注意しなければならない。「君子」という語は『論語』において、「徳の高い立派な人物」として描かれて以来、中国人が理想とする人物像としての意味を持つに至つた。「君子」にはほかに、「官吏・君主・夫」などの意味があるが、設問では、「利を慮らず、心を慮る。(利益に思いをめぐらさず、人の心を思う。)」という部分から判断できる。「君子」の対義語として①「徳のない人。②身分の低い人。」の意味を持つ「小人」の語も合わせて確認してもらいたい。

(4) 「悪」は「アク」と発音して、「わるい」という意味で用いられることが多い。「悪人・悪意・善悪」といった熟語がそれである。その時の訓読は「あし」である。漢文ではそのほかに、「憎悪・嫌悪」という熟語からわかるように、「にくむ」という意味で用いられることがある。その際は「にくム」と訓読する。⑤「醜悪」の「悪」は「みにくい」という意味である。

(5) 多義語の意味は、その語を含む熟語に反映されて、現代の私たちの生活に密接にかかわっているものが多い。「辞」もその一つであることは、選択肢の熟語を見ても明らかであろう。

「辞」の意味は主に次の三つである。①ことば(辞書・祝辞) ②別れを告げる(辞去) ③ことわる・やめる・遠慮する(固辞・辞退・辞讓)。

漢文では右の②、③のどちらも「じス」と読むことを覚えておこう。設問の「辞」は、その下の「家」が判断のポイントとなるであろう。

(6) 漢文の中には、現代日本語と読みも意味も違つて用いられているものがあるので注意しなければならない。漢文では「人間」を「じんかん」と読み、「人の世・俗世間」の意味で用いる。したがつて、設問は「じんかんはんじさいをうがうま」と読む。「人の世の幸と不幸は定めのないものだ。」というたとえである。なお、漢文で人間を表す場合は「人」を用いる。故事は『淮南子』にある。

(7) 現代語では「小人」は「こびと」と読むが、漢文では「せうじん(しょうじん)」と読み、「①徳のない人 ②身分の低い人」の意味である。特に①は「徳の高い立派な人物」を意味する「君子」の対義語であり、頻出するので注意が必要である。

(8) 現代日本語において「故人」は「亡くなった人」を指すが、漢文では「友人」の意味である。「故」は「古」と同じ意味で「ふるシ」と読む用法がある。したがつて、「故人」は「古い知りあい・昔からの友人」という意味である。